馬耳東風

平成26年，干支は「午」.「馬」に因み今年一年を力強く疾走したいと初詣に願をかけた人も多いようだ．全速で駆ける馬を間近で見るとその迫力は凄く，思わず感嘆の声が出る．ところが，兜町では「午尻下がり」というジンクスがあり，今年は株価が下がる年になるのではとの悲観論があるらしい．世の中の景気が上向いてきた矢先，これは当たらないでほしいものだ．日本で近代競馬が始まったのは150年も昔の事であるが，その間，能力の高い馬の交配による優生繁殖で走力は格段に向上しただろうと思っていた．ところが記録が残る日本ダービー優勝馬の成績を見ると1932年に165秒，1937年に150秒台になり，その後多少の上下はあるものの1972年に140秒台となった後はほぼそのまま推移し，昨年は144秒である．80年間で約13％速くなったことになる．科学的に最良と思われる方法を駆使して育成し，最良の状態で走らせた結果がこれである．近代になり精力的に育種が行われてきた家畜においては成長が非常に早くなったが，飼料効率の改善に関しては，統計数値を見ると例えば採卵鶏，肉用鶏では1990年以前は急速に改善が進んだが，それ以降ほとんど改善されず限界が見えてくる．

果たして人間の能力は向上しているのだろうか．確かに産業革命以降，急速に発展した科学技術の恩恵を受けて，現在では世界的に見ても多くの人々が非常に豊かな社会生活を享受しているように見受けられる．40年以上も前に人間は月に行ける手段を開発し，最近では山中教授の開発したiPS細胞技術に代表されるように人体の臓器が再生できる時代になった．しかし，調べてみると我々人間の能力も近年に限ってみるとそれほど向上しているとは思えない．それは偏見であろうか．例えば，人の体力を現す指標として，オリンピックの百米競走の優勝タイムを見ると，1900年に11秒0であったものが2000年には9秒8になった．これは百年かかって約11％短縮したことになる．また，知的能力を最も端的に表現していると思われる芸術分野に関してみると，モーツアルトを凌ぐ作曲家はその後出ていないし（小柴昌俊氏談），レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロを凌駕する芸術家もこの約500年間，出ていないと思う．蓄積された知識がゼロの状態で生まれた人間の脳は，経験や教育を通じて学習した能力を蓄積し，それらを応用して新たな世界を創造する能力を持つに至る．我々の細胞にはY染色体とミトコンドリア染色体を除いて両親から受け継いだ遺伝情報が等しく書き込まれている．確かにそうであろうが，改めて親から受け継いだ遺伝情報は何世紀も前の先祖と同等であると考えると複雑な気持ちになる．進歩を期待していた自分は幻想を抱いていたのだろうか．技術は蓄積できても人の能力は蓄積できない，「出藍の誉れ」はあっても「トンビがタカを生む」ことは科学的に考えれば無いことである．将来も雌雄両遺伝子は一部の誤転写を除いて正確に転写され引き継がれて行くのだろうが，転写ミスによる突然変異も結果は良悪どちらに表現されるか解らない．今，人類学者の間では，急速に進むY染色体上の遺伝子の欠損が大きな問題になっているという．科学技術の進歩と人の能力の乖離が進めば人類はどうなってゆくのだろうか．新年早々からこんな事に思いを巡らせた．（青）